

## ディスコミュニケーションの分析 ーオースティンの言語行為論を用いてー

大野 優花

会話をしているとき、考えていることが相手にうまく伝わる時と伝わらない時がある。うまく伝わる時は会話が円滑に進むが、伝わらない時は会話のどこかで齟齬が生じ、円滑に進まない。なぜ、考えていることが相手にうまく伝わらず、会話に齟齬が生じるのかについて疑問を持った。会話に齟齬が生じることをディスコミュニケーションと呼ぶ。ディスコミュニケーションが引き起こされる原因として何があるかを明確にすることによって、ディスコミュニケーションをなくすための方法を模索したいと考えている。

本研究では、会話において生じるディスコミュニケーションの原因を見るため、『江戸笑話集』を事例の一部として分析を行った。分析には、オースティンの言語行為論を用いた。オースティンの言語行為論の中で、特に適切性条件に注目した。適切性条件とは、行為遂行的発言を円滑、かつ適切に機能させるために必要とされる事柄である。オースティンは行為遂行的発言が正しく行われているかどうかを、適切性条件を用いて観察し、失敗に終わった事例を適切性条件が満たされていないものとして分類した。

この手法に習い、『江戸笑話集』から抽出した話の中にある会話を分析した。分析した結果、選出した笑い話の中にはディスコミュニケーションを見ることができたものと見ることができなかったものがあった。ディスコミュニケーションが見ることができたものの中でも分析できたものと分析が難しいものがあった。分析できたものの傾向として、ある行為に関して、それを行う状況や人物が適切ではないという事例が多く見られた。また、行為自体はうまくいっていたが、いくつかの原因によってその目的が達成できていないものがあることも分かった。

分析が難しいものの特徴として、行為として曖昧なものが最も多く見られた。行為が一つに決まらず、いくつかの手続きが見られる可能性のあるものが曖昧なものとして考えられた。例えば、「見栄をはる」という行為のように、その行為をするための手続きとして「嘘をつく」「ごまかす」などいくつか手続きが見られるものであった。また、話の中における情報が少なく、明確な分類をすることが難しいものがあった。

その結果から、今回分析することができなかったディスコミュニケーションの事例について、オースティンの言語行為論以外にどのような方法で分析できるのかを検討していく必要がある。

(指導教員 横山幹子)